

Alma Redemptoris Mater の祈り: Chaucer, “The Prioress’s Tale”

柴 田 竹 夫

チ ョ ー サ ー (Geoffrey Chaucer, 1340? -1400) の「女子修道院長の話」 (“The Prioress’s Tale”)⁽¹⁾ (以下 PrT と略す) は、『カンタベリ物語』 (*The Canterbury Tales*) の中の一話、チ ョ ー サ ー 後期の作 (1385年以降)⁽²⁾ である。哀れな死を遂げる 7 才の無辜の男の子の歌う典礼聖歌 *Alma Redemptoris Mater* (救い主を育てた母の意) の祈りが聖母マリアに届き、聖母の「執り成し」によって神はこの子を救うという、聖母による奇跡の話である。PrT は聴衆の心を強く動かす宗教的な話である。語り手の女子修道院長 (the Prioress) が聖母の奇跡の話 (“miracle”) (691) を語り終えると聴衆一同はしんみりと (“sobre”) (692) なる。だが一方この話は語り手の性格が反映した、つまり彼女の語りによる話という面を見逃すわけにはいかない。

「女子修道院長の話の前口上」 (“Prologue of PrT”) において、宿の亭主 (the Host) から船乗り (the Shipman) に引き続いて話をするよう頼まれると女子修道院長は快く引き受ける。女子修道院長として当然の如く神を讃え、聖母の話をするという。この時彼女は聖母への invocation⁽³⁾ において、聖母の「執り成し」⁽⁴⁾ (“preyere”) (479) によって神の下へと我々人間は導かれるという。この聖母による神への「執り成し」はチ ョ ー サ ー の詩 “An ABC”⁽⁵⁾ にも見られるもので、神が苦難の哀れなるものに対して憐れみ (mercy) を掛けてくださるよう聖母にその執り成しを祈るものである。

Dowte is ther noon, thou queen of misericorde,

That thou n'art cause of grace and mercy heere;
God vouched sauf thurgh thee with us to accomde.

(「憐れみ深き元后よ、まことに

御身こそこの世の恵みと憐れみの源

神は御身を通して我等と御手を結び給えり。)」(“An ABC,”25-27)

語り手も神の多大なる憐れみ (“mercy”) (688,689) を請うて話を締め括る。「PrT の前口上」における聖母の「執り成し」によって神の「憐れみ」を請うという型は、まさに PrT において敷衍されている。本稿は、聖母の奇跡の話における *Alma Redemptoris Mater* (以下 *Alma* と略す) の祈りに焦点を当てて PrT を読み解こうとするものである。

聖母を讃える話をするといって、語り手は、昔小アジアのある大きな町の一面にユダヤ人の住むゲッターがあり、町はずれにはキリスト教徒のための小さな (“littel”) (495) 学校があったと語り始める。この学校に通う子供 (“smale children”) (501) の一人に7才の男の子 (“a littel clergeon”) (503) がいて、毎日通学して初等の読本 (“prymer”) ⁽⁶⁾ (517) を習っていた。寡婦の子であった。彼女は彼 (“hir littel sone”) (509) に聖母 (“Oure blisful Lady, Cristes mooder deer”) (510) を信仰するように教え込んでいた。道端で聖母像を見かけるとこの子はひざまず跪いて *Ave Marie* (508) の祈りを唱えるのであった。この子 (“This littel child”) (516) が読本 (“his littel book”) (516) を習っている時、ラテン語の意味もわからずに、上級生の習う典礼聖歌 *Alma* (518) を耳にし、心引かれて、年上の友人にこの歌の説明を求める。友人はこの歌が “our blisful Lady free” (532) を崇めるために作られ、自分たちが死ぬ時に自分たちが救ってもらえるように祈るためのものなのだ、それ以上は僕も知らないと答える。するとこの無邪気な (“innocent”) (538) 子は、聖母様を崇める歌と知って、ラテン語もよくわからずにクリスマスまでにはぜひ覚えようと決心する。毎日学校の行き帰り、友人に教わってはこの子は聖歌の練習をする。ユダヤ人のゲッターを通り抜ける時も大きな声で楽しげに歌う。

これほどにこの子は聖母を深く信仰していたのだ。聖母の暖かい心 (“swetnesse”) (555) がこの子の心に深く染み込み、登下校の時も歌うことを止めることが出来ないほどであった。

語り手は男の子が幼い (“litel”) 子であること、母親の教えもあってこの子が素朴に聖母を信じて聖母を崇める *Alma* の祈りの歌を繰り返し (“sing,” “song,” “singing” という言葉が各々11, 10, 2回現れる) 歌うことを強調する。名も無き男の子の無邪気さ、無力さ、幼さを示す言葉は、この子の紹介がなされている557行目迄を含めて, “determinatio”⁽⁷⁾ (the controlled application of selected limiting adjectives) という修辞法に基づいて, “litel” が9回, “smale” が1回, “yonge” が1回, “Lamb” が2回, “innocent(z)”⁽⁸⁾ が4回の計17回も頻出する。チャーサーはこの男の子の年令を通常就学年令である7才 (503) としているが, 類話⁽⁹⁾ (Cグループ) においては明示された年令は10才であり, C. Brown はこの話の “pathos” (哀感) を高めるためにチャーサーが改変したという⁽¹⁰⁾。更にチャーサーはこの男の子に *Alma* を教える年上の男の子を付加⁽¹¹⁾することによって, この幼子の “litel” さを更に強調しようとするのである。

類話 (A, Bグループ) において, その大半が, この子の歌う歌は *Gaude Marie* であるのに対し, PrT の粉本と考えられているCグループの類話はその多く (C 1, 2, 5, 6, 8, 9, 10) が, 降臨節 (Advent) (クリスマス前4週間) から聖燭祭 (Candlemas) (2Feb.) までの典礼における聖母に対する聖歌である *Alma* であり⁽¹²⁾ (C3-“Ave Regina”; C4-“Santa Maria”; C7-“Gaude Maria”), PrT においてこの祈りは5回現れる。その現れを見ると, 初めの2回 (518, 554) は男の子の紹介において, 聖母への信心深さの現れとして, 3回目 (612) においては子の名を呼ぶ母の声に应えて喉を切られて横たわっていたにもかかわらず穴 (屋外便所) の底からこの歌を歌ってあたりに響き渡らせ歌うことを止めない。更に聖水にかけられた時にも歌い始める (636)。最後に修道院長の喉を切られているのにもかかわらず, なぜ歌い続けられるのかという問いに, 聖母を信心していたから声高く, はっきり

と歌えるのです (655) とこの幼子は答える。

この様に *Alma* はこの幼子の聖母への信心深さを端的に現している祈りであり、そして「救い主の母」としての神の母への祈りを通してその憐れみによって救い上げられる、無邪気に聖母を信じる幼子の姿、それは何よりも聖母を讃えたものになっている。*Alma* の祈りは PrT において語り手が語ろうとする聖母讃歌の心を端的に現しているのである。

ユダヤ人⁽¹³⁾のゲッターを通る時も *Alma* を歌い続ける幼子に対し、悪魔 (“Oure firste foo, the serpent Sathanas,/That hath in Jues herte his waspes nest”) (558-9) は怒って、この町のユダヤ人達を^{そそのか}唆す。この様な子供がおまえたちを軽蔑して好き勝手に歩き、おまえたちの法の畏敬に敵対する信仰を歌っているが、それは正しいことなのかと。するとユダヤ人達はこの無辜の幼子 (“innocent”) (566) をこの世から葬ろうと画策し、子供を殺害する。呪うべきユダヤ人 (“cursed Jew”) (570) は子供を捕まえて喉を掻き切り、穴つまり屋外便所に投げ込む。この “cursed” という言葉は、PrT においてユダヤ人と結びついて繰り返し出てくるエピソードである。語り手はユダヤ人のことを “O cursed folk of Herodes al newe” (574) と自らの権力を脅かされると思い誕生したばかりのイエスを殺そうとしたヘロデ王と結び付け、この呪うべき行い (“cursed dede”) (578) は自ずと露顕すると憤る。家に帰ってこない幼子を寡婦は聖母の御名を唱えながら捜し求める。忌まわしいユダヤ人 (“the cursed Jues”) (599) の間をも探すが、誰も知らないと言うばかり、だがキリストの恵みによって彼女はちょうど子供が投げ込まれた穴の側で子供の名を呼ぶ。すると子供は *Alma* の歌をあたり一面響き渡る大きな声で歌い出す。キリスト教徒達は直ちに町の行政長官を呼びにやり、すぐにやってきた彼はキリストと聖母を讃えたあと犯人のユダヤ人を捕らえる。深い嘆きと共にキリスト教徒達は *Alma* を歌い続ける幼子を立派な葬列を作って近くの寺院に運ぶ。母親は棺の脇で気を失い、誰も彼女をその場から引き離すことが出来ない。この様な悪事 (“cursednesse”) (631) を見過ごせなかった行

政長官はこの殺人に関与したユダヤ人をすぐさま拷問にかけ死刑に処する。更に語り手は、忌まわしいユダヤ人 (“cursed Jewes”) (685) がリンカーンのヒュー⁽¹⁴⁾ (Hugh of Lyncoln) という子供を殺害した話もよく知られたことだと言う。

この様に “cursed” という言葉は、ユダヤ人にまつわるエピソードとして 5 回現れて、PrT におけるユダヤ人がどの様な存在であるかを聴衆にアピールしている。そもそもユダヤ人は PrT の初めにおいて、イエスとキリスト教徒に嫌われている高利貸し (“foule usere”) (491) (高利貸しは法で禁止されており、これを行うものは重罪人とみなされた) と闇儲け (“lucre of vileynye”) (491) を行う “cursed”⁽¹⁵⁾ な存在として登場する。

類話 (C グループ, C 3 は除いて) においては殺された幼子の死体は便所 (“wardrobe” = jakes) に投げ込まれる (これは A, B グループには見られない)。更に A グループでは子供の死体は地中から生きて掘り出され、これを見たユダヤ人は、(A グループの大半において) キリスト教に改宗する。B グループではユダヤ人はキリスト教徒に知られる前に自らの罪を告白し、(B グループの大半において) ユダヤ人は改宗し、洗礼を施される。しかるに C グループの類話では A グループのように子供が生き返る奇跡もなく、埋葬のシーンという悲劇的な結末で話が終わる⁽¹⁶⁾。

幼子の年令を10才から7才にチョーサーが改変したことについて、C. Brown はそれをこの話の “pathos” (哀感) を高めるためと言ったが、まさしくこの様に惨くも幼子の死体が便所に投げ込まれることやこの子の悲劇的な死の結末も又、この話の “pathos” を高め、そして「教区司祭」(the Parson) も “the cursed Jewes” (“The Parson’s Tale,” 591), “the cursed Jewes, or elles the devil” (599) と呼んでいる忌まわしき (“cursed”) ユダヤ人の姿を聴衆に印象付けようとするチョーサーの意図の下にあると考えられる。

PrT は聖母マリアを讃える話であると語り手は言うが、それでは聖母はこの話においてどの様に描かれているのか、更に検討してみる。この話におい

て聖母の名は14回現れる。内10回は「神の母」(“Cristes mooder”) (506, 510, 538, 550, 556, 597, 619, 656, 678), (“his mooder Marie”) (690) として、その他「我等が祝福されし婦人」(“Oure blisful Lady”) (510), 「我等が寛大なる祝福されし婦人」(“oure blisful Lady free”) (532), (“blisful Mayden free”) (664), 「我等が婦人」(“Oure Lady”) (543) と呼ばれている。天使ガブリエルは身籠もったマリアの下に神から遣わされてこう告げる。

「あなたにあいさつします、恩寵に満ちたお方。主はあなたとともにおいでになります。(あなたは女の中で祝福された方です。)」(Luke 1:28) この様に聖母は常に神と共にあって神に祝福された (“blisful”)⁽¹⁷⁾ 存在なのである。

「神の母」という呼称は、431年のエペソ公会議 (the Council of Ephesus) において *Theotokos* (*Deipara*, or Mother of God)⁽¹⁸⁾ として正式に認められ、この時^{あがな}贖い (the Redemption) においても聖母が役割を担うこと (“Coredemptrix”)⁽¹⁹⁾ も公式に認められる。これによってキリスト教以前からの大地母神信仰が聖母崇敬 (the Cult of Virgin) として吸収されることになる。12世紀になると、William of Malmesbury, Dominic of Evesham たちによる聖母の奇跡の説話集と共に聖母崇敬が広まりを見せる。ここで罪人の救いにおける聖母の執り成し (intercessory) の御力が強調される。そして中世後期になると聖母は “Oure Lady of Pity” と呼ばれるようになる⁽²⁰⁾。

聖母に対する、人間のための神に対する「仲介者」(“Mediatrix”) の称号はその起源ははっきりとしないが、9世紀東方より入ったと考えられており、次の三つの理由に基づいている⁽²¹⁾。

- (1) “Owing to her divine motherhood and plenitude of grace, she occupies a middle position in the hierarchy of beings between the Creator and His creatures.”
- (2) “During her earthly career she contributed considerably, through specific holy acts, to the reconcilliation between God and man brought about by the Savior.”
- (3) “Through her powerful intercession in heaven she obtains for her

spiritual children all the graces that God deigns to bestow on them.”

PrTにおいて、母親は姿の見えなくなった我が子を聖母の御名を唱えながら捜し求め、一方幼子はひたすら聖母を讃え、*Alma* を歌い続ける。この子は忌まわしきユダヤ人に喉を掻き切られて命がつきかけた時、常日頃から信じていた「慈愛の泉」(“This welle of mercy”) (656) の聖母が目の前に現れ、死にゆく時 *Alma* の聖母讃歌を彼の舌の上に聖母が載せた粒 (“a greyn”) ⁽²²⁾ が取り除かれるまで歌い続けることになるかと告げる。聖母とそのときこの無辜の幼子、*Alma* を歌ったがもとで殉教したこの子を憐れみ、怖がることはない、見捨てはしないとこの子を元気づける。

“My litel child, now wol I feche thee,
When that greyn is fro thy tonge ytake
Be nat agast, I wol thee nat forsake.” (667-9)

哀れみの源、神に祝福された存在として、聖母は、この幼子を救い上げて天の国に運ぶのである。

こうした働きは、神に全く依存した、神に対する「執り成し」によるのであり、語り手は「PrT の前口上」における聖母への invocation を “O Lord, oure Lord” (453) と神への呼び掛け (apostrophe) で始め、聖母に神への「執り成し」を請願したが、PrT の結びにおいても語り手は、聖母崇敬により神が我等に哀れみを掛けて下さるようにと祈る。

That, of his mercy, God so merciabile
on us his grete mercy multiplie,
For reverence of his mooder Marie.

Amen (688-91)

結局 PrT において聖母は “Mediatatrix” としてある。

PrT の寡婦とその幼子については聖書への言及、及び聖母子との関連性が

見える。“cursed”なユダヤ人に殺される幼子は、ユダヤの王ヘロデに虐殺された嬰兒を思い起こさせる（この時幼子イエスはマリアともどもかろうじて難を逃れる）。預言者イエレミアの預言（Jeremiah 31:15）は実現し、ベトレヘムとその付近の地方にいる2歳以下の男の子は皆殺しにされる。「ラマに声が聞こえた、うめきと、激しい悲嘆の声。子のために泣くラケルの声。彼女は慰めを受けつけない、子はもういないから」(Matt. 2:18)。語り手はPrTにおける“cursed”なユダヤ人を、“cursed folk of Herodes” (576)に譬えている。更にこの幼子の寡婦は“newe Rachel” (627)と呼ばれ、旧約のラケル同様、激しい悲嘆と共に慰めを受け付けようとはしない (626-7)。又聖母への信仰を我が子に教え続けた敬虔な寡婦は新約のアンナを思い起こさせる。寡婦になっても夜昼となく神に奉仕する彼女は、幼子イエスのことを人々に話す (Luke 2:36-38)。更に行方不明になった我が子を探し求めるこの寡婦の姿は、やはり姿の見えなくなった我が子イエスを探し求め神殿にいるのをやっとのこと見つけるマリアを思い起こさせる (Luke 2:44-47)⁽²³⁾。更に “This gemme of chastite, this emeraude,/And eek of martirdom the ruby bright” (609-610) と呼ばれる幼子は殉教者 (“martir”) (680) として手厚く葬られるわけであるが、この幼子の姿は「受難」(the Passion) のイエスを思い起こさせる。十字架に架けられたイエスは、側に母と愛する弟子とが立っているのを見て、母に「婦人よ、これがあなたの子だ」と言い、弟子には「これがあなたの母だ」と言う (John 19:26-27)。「神の子」であると同時に「マリアの子」でもあるイエスは、深い悲しみに包まれた母の心情を思いやるが、ここでイエス御自らマリアは「救い主キリストの母」であるのみならず「人々の母」であり、その「マリアの新しい母性」を明らかにしている。ここにもマリアの人々のための「執り成し」の役割が看取れる。この意味でも殉教の幼子が *Alma* を歌うことに相応しいことが受難のイエスの姿から思い起こされるのである。

聖母を信心することを教え続ける母の言いつけに従順に守って *Alma* を歌い続け殉教者として天に召される幼子、聖母の “swetenesse”⁽²⁴⁾ (= gracious-

ness) (555) が心に染み通った幼子は, “sweete”⁽²⁵⁾ (=precious) (656) な聖母同様に彼の亡骸も “sweete” になる (“his litel body sweete”) (681)。マリアとイエスが深い苦悩を味わったのと同じく, この母子も “cursed” なユダヤ人のために深い苦悩を味わうが, “Mediatatrix” としての聖母マリアの「執り成し」によって幼子は天に召されたのである。これは暴力は真の力ではなく, 真の力は人間を慈しむ神にあることの証でもある。

この様に PrT の母子と聖母子とのイメージの重なりはこの母子の信心深さと深い苦悩を聴衆に印象付け, それ故に PrT に “pathos” を与えることに役立っていると考えられる。

PrT とその前口上は “rhyme royal” の詩形で書かれている。Helen Cooper は, この詩形と PrT との関係について, この詩形が PrT に詩的な威厳と真面目さを与えており, 『カンタベリ物語』における “pathos” にまつわる話に使用されていることを指摘する⁽²⁶⁾。R. O. Payne もこの詩形が『カンタベリ物語』において “emotion” (情動) の技巧の一つの手段として使われていると言う⁽²⁷⁾。

PrT が “emotion” にまつわる話であることは, Payne のみならず, 他の批評家も指摘していることである。例えば C. D. Benson は, 次のように言う⁽²⁸⁾。

In the *Prioress's Tale* all the resources of the poet's art are employed to evoke strong emotions in an audience, especially a close identification with the sufferings of its two main characters (the clergeon and his mother) and indignation at their wicked persecutors.

PrT における “emotion” とは, H. Cooper も言う様に, 具体的には “pathos” である。PrT の “pathos” については先に, 幼子の年令, 幼子の惨い死, そして母子の聖母子のイメージの重なりについての考察において既に言及した様に, PrT の主題と深く関わっている。チョーサーは “pathos” を聴衆の心に喚起するために様々な工夫を凝らしているわけで, *Alma* の祈りの意味も

この PrT の持つ強い “pathos” の感情の下に考察しなければならない。

PrT は R. J. Shoek⁽²⁹⁾ の言う様な anti-Semitism の話でもなければ、C. Wood⁽³⁰⁾ の言う、チャーサーが “a completely failed ecclesiast” を描こうとしたのでもない。一方、語り手は自らのことを「PrT の前口上」において、1才の子供にたとえること（勿論謙遜と考えられるが）や、PrT における幼子にまつわる “lifelike” をはじめとする幼さを示す言葉、更には「カンタベリ物語の前口上」における女子修道院長の子犬など彼女の性格についての “lifelike” さとの関連性が見られることを考慮した場合、語り手の “childlike innocence”⁽³¹⁾ を簡単には打ち消せなくなってくることも確かである。

更に PrT は女子修道院長に対する激しい諷刺とか皮肉を意図したものでないと思う。かといって Derek Pearsall⁽³²⁾ の言う様に、PrT は女子修道院長に対するチャーサーの賛辞であると断定することもむずかしく思われる。

PrT における *Alma* の祈りの意味を考えると、まず母子の信心深さ、敬虔さを現し、次に “Mediatrice” としての聖母と彼女の「執り成し」によって神が人間に憐れみを掛けることが汲み取れる。「祈り」とはそもそも「神と共にある」を言うのであって、*Alma* の祈りはいずれにしても PrT の母子のみならず語り手の、神と共にありたいと願う素朴な心の現れと考えられる。それはイエスが、幼子の様に謙^{へりくだ}る人が天の国でいちばん偉いと弟子たちに答えた (Matt. 18:1-5) ことを思い起こさせる。

従って *Alma* の祈りの点から PrT を見るとどうなるであろうか。女子修道院長の “childlike innocence” の面は容易に打ち消せないけれども、“pathos” によって聴衆に訴え掛けるという PrT の重要な面を考慮すれば、それ以上にチャーサーは、PrT を “pathos” という “emotion” を主眼とした話としており、そして “childlike innocence” の女子修道院長の姿に対比して、幼子の “innocent” な祈りの姿を描くことによって、女子修道院長の素朴だけれども情動的な敬虔さを PrT において描いているのではないかと考えられる。

注

- (1) “The Prioress’s Tale” からの引用はすべて Larry D. Benson (ed.), *The Riverside Chaucer*, 3rd ed. (Oxford: Oxford Univ. Press, 1988) に依り, 本文中括弧内の数字は行数を表す。聖書からの邦語引用は『旧約新約聖書』(東京:講談社, 昭和55年) に依る。
- (2) Robert Dudley French, *A Chaucer Handbook*, 2nd ed. (New York: Appleton Century Crofts, 1927), p.242.
- (3) Cf. “It was a regular literary convention to prefix to a miracle or saint’s legend an invocation to Christ or the Blessed Virgin.” (F. N. Robinson [ed.], *The Works of Geoffrey Chaucer*, 2nd ed. [Oxford: Oxford Univ. Press, 1957], p.735)
- (4) “preier (e, “*M. E. D.*, n. (2), 2a. (a) “A prayer, supplication; an intercession with God.” (初出は c1330年, チョーサーのこの箇所を引例 [a 1390年])
- (5) 制作年は1370年以前と推定されている (R. D. French, p. 82)。以前 “An ABC” の和訳を試みた。(『親和女子大学英語英文学』第4号, 昭和59年)。
- (6) “An elementary school book, usually containing the alphabet, basic prayers, elements of the faith (creed, seven deadly sins, etc.) and simple devotions such as the Hours (little Office) of the Virgin Mary.” (L. D. Benson, p. 915)
- (7) チョーサーは PrT においてこの修辭を70回使う (Robert O. Payne, *The Key of Remembrance: A Study of Chaucer’s Poetics* [Westport, Connecticut: Greenwood Press, 1977], p.169)。なお PrT における修辭については *Ibid.*, pp. 167-170 を参照。
- (8) “innocent, “*M. E. D.*, adj. (a) “Free from sin or guilt, not guilty”; (b) “intending no harm, harmless”; (c) “ignorant, unaware, unsuspecting, naive, simple”; (d) “of a child: young, unsophisticated.” “innocent,” *M. E. D.* n. 1. (d) “? an inexperienced person, tyro.” (PrT [635] を引例, c1390年)
- (9) Carleton Brown は33ある類話を A. B. C のグループに分類し, PrT は C グループに属すると考える (W. F. Bryan and Germaine Dempster [eds], *Sources and Analogues of Chaucer’s Canterbury Tales* [Atlantic Highlands, N. J.: Humanities Press, 1941], p.460)。
- (10) *Ibid.*, p.465.
- (11) *Loc. cit.*
- (12) *Ibid.*, p.450. この聖歌は Walter W. Skeat (ed.), *The Complete Works of Geoffrey Chaucer*, 2nd ed. (Oxford: Oxford Univ. Press, 1972), vol. V, p. 178に載る。Cf. Carleton F. Brown, “Chaucer’s ‘Litel Clergeon’,” *Modern Philology* 3 (1905-6), 9; “The *Alma Redemptoris* of the *Breviary*, then, is the only one which can be properly referred to as a Marian antiphon.” (*Ibid.*, p. 10) ; “Marian antiphons, then, are mentioned in the statutes of grammar schools as part of the regular exercises. In this fact we have a sufficient explanation of the singing of the *Alma Redemptoris* in

- Chaucer's school." (*Ibid.*, p.13) なお現在では「教会の祈り」の結びの歌の1つとして毎日就寝前に祈られている。
- (13) ユダヤ人は、彼等の資本を必要とする William the Conqueror (1066-1087) に招かれて England に渡るが、1290年7月18日をもって England から追放される (Max L. Margolis and Alexander Marx, *A History of the Jewish People* ["A Temple Book"; New York: Atheneum, 1985], pp.384-391)。
- (14) "The Young Hugh of Lincoln was said to have been martyred by Jews in 1255." (L. D. Benson, p.916) Cf. "Medieval Christians... believed that Christian children were seized and tortured to death by the Jews during the Passover season.... The story of the ritual murder of the William of Norwich is virtually the first of a long series of such accusations...." (Jacob R. Marcus, *The Jew in the Medieval World, A Source Book: 315-1791* [New York: Atheneum, 1983], p. 121)
- (15) "cursed," *M. E. D.*, ppl. 1a. "Under a malediction or imprecation; condemned to misfortune or misery; condemned to hell; damned, accused." 2. "Under an ecclesiastical curse; excommunicated, anathematized." 3a. "Sinful, wicked, evil; also condemned as being sinful." 4. (a) "profane, impious, unholy"; (b) "execrable, abominable, detestable."
- (16) W. F. Bryan and G. Dempster, pp. 448-450.
- (17) "blisful," *M. E. D.*, adj. 2(b) "blessed. holy, sacred."
- (18) David Hugh Farmer, *The Oxford Dictionary of Saints*, 2nd ed. (Oxford: Oxford Univ. Press, 1987), p. 290.
- (19) *New Catholic Encyclopedia*, ed. by William J. McDonald (Washington: The Catholic Univ. of America, 1967), vol. IV, p. 359.
- (20) D. H. Farmer, p. 291.
- (21) *New Catholic Encyclopedia*, vol. x, p. 359.
- (22) この "greyn" は、a lily, a precious stone, a grain of pearl などの諸説があるが、なかでも "a grain of paradise (cardamon)" (Paul E. Beichner, "The Grain of Paradise," *Speculum* 36 [1961], 302-7) と取るのが、幼子が天に召されることを考えると PrT に最も相応しいと思う。
- (23) Cf. "Technically married to St Joseph, [Mary] is always represented in paintings of the Passion, and of her own last days, as a widow," (Roger Ellis, *Patterns of Religious Narrative in the Canterbury Tales* [London: Croom Helm, 1986], pp. 77-78)
- (24) "sweetness," *O. E. D.* 7, "Of disposition, manner or conduct: graciousness, gentleness, kindliness, mildness." (c1366年 Chaucer A. B. C. 51 を引例)
- (25) "sweet," *O. E. D.* adj. 8, "Dearly loved or prized, precious; beloved, dear."
- (26) Helen Cooper, *The Structure of the Canterbury Tales* (Athens: The Univ. of Georgian Press, 1984), p. 167. その他『カンタベリ物語』において rhyme royal は

"The Man of Law's Tale," "The Clerk's Tale," "The Second Nun's Tale" において使われる。

- (27) R. O. Payne, p. 165.
- (28) C. David Benson, *Chaucer's Drama of Style: Poetic Variety and Contrast in the Canterbury Tales* (Chapel Hill: The Univ. of North Carolina Press, 1986), p. 139. その他 Carolyn P. Collett, "Sense and Sensibility in the Prioress's Tale," *Chaucer Review* 15 (1981), 138-50; Albert B. Friedman, "The Prioress's Tale and Chaucer's Anti-Semitism," *Chaucer Review* 9 (1974), 118-29.
- (29) R. J. Schoeck, "Chaucer's Prioress: Mercy and Tender Heart," in *Chaucer Criticism*, vol. 1, ed. by R. J. Schoeck and J. Taylor (Notre Dame: Univ. of Notre Dame Press, 1960), pp. 245-258.
- (30) Chauncey Wood, "Chaucer's Use of Signs in His Portrait of the Prioress," in *Signs and Symbols in Chaucer's Poetry*, ed. by J. P. Hermann and J. J. Burk, Jr. (University: Univ. of Alabama Press, 1981), pp. 81-101.
- (31) C. D. Benson, p. 139. Cf. Ian Robinson, *Chaucer and the English Tradition* (London: Cambridge Univ. Press, 1972), p. 149; Trevor Whittock, *A Reading of the Canterbury Tales* (London: Cambridge Univ. Press, 1970), p. 208.
- (32) Derek Pearsall, *The Canterbury Tales* ("Unwin Critical Library"; London: George Allen & Unwin, 1985), p. 251.